山形県埋蔵文化財調査報告書第39集

下槇遺跡

発掘調査報告書

1981

山形県教育委員会

下槙（しもまき）遺跡

発掘調査報告書

昭和56年3月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した県営圃場整備事業大堰第３地区にかかる「下槇遺跡」の発掘調査結果をまとめたものであります。

下槇遺跡は、山形県のほぼ中央、最上川沿いの肥沃な水田地帯にあり、調査によって古墳時代の集落跡であることが確認されました。中でも「琴柱(ことじ)型石製品」は東北においてはじめて出土したもので、当時の精神文化を明らかにする極めて貴重な手がかりを得ることができました。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの問題が山積しております。この両者の調整を行ない埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題であり、県教育委員会においては一層の努力を重ねてきているところであります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

終りに、調査にあたって適切な御指導と多大なる御協力をいただいた関係各位に心から感謝申し上げるものであります。

昭和56年３月

山形県教育委員会
教育長　大竹正治

例　　言

1　本報告は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した、山形県営圃場整備事業・大堰第３地区にかかわる緊急発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、村山西部土地改良事務所の大堰土地改良区並びに河北町教育委員会などの関係諸機関の協力を得た。発掘調査期間は、昭和55年10月６日～11月７日（延23日間）である。

3　挿図縮尺は、各遺構については50分の１、遺物については３分の１を基本としている。図版縮尺は、遺物は４分の１である。なお、石製品については３分の１を基本としている。

4　挿図中の記号は、ＳＴ－竪穴住居跡、ＥＤ－壁溝、ＥＰ－柱穴、ＥＬ－カマド、ＳＤ－溝跡、ＳＫ－土壙、ＳＸ－性格不明遺構、また、遺物については、ＲＰ－土器・土製品、ＲＱ－石器・石製品で示した。遺構内覆土はＦで記号化した。

5　調査体制は下記のとおりである。

調査主体　山形県教育委員会
調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査図
調査担当者　佐々木洋治（主任調査員）長橋至（現場主任）名和達朗（調査員）
渋谷孝雄（調査員）阿部明彦（調査員）　〔山形県教育庁文化課〕
事務局　事務局長　浜田清明　〔山形県教育庁文化課課長〕
事務局長補佐　荻野和夫　〔山形県教育庁文化課課長補佐〕
事務局員　設楽周一郎　田内糸子　〔山形県教育庁文化課〕

6　本報告書の作成は、長橋至が担当し、執筆した。全体については佐々木洋治が統括し編集は名和達朗が担当した。

挿図・図版作成にあたっては、太田八恵子、津留房子、高橋貴恵子・黒金佳子・佐藤隆子・池田洋子・鏡克子・山口由紀子・枝松美保子・吉田史子・奥山厚子がこれを補助した。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の概観
　1　立地と環境 …… 2
　2　遺跡の概要 …… 2
Ⅲ　遺構と遺物
　1　遺構（A・B地区） …… 4
　2　遺構（C地区） …… 14
　3　遺物 …… 15
　　石製品 …… 19
Ⅳ　まとめ …… 20

挿　図　目　次

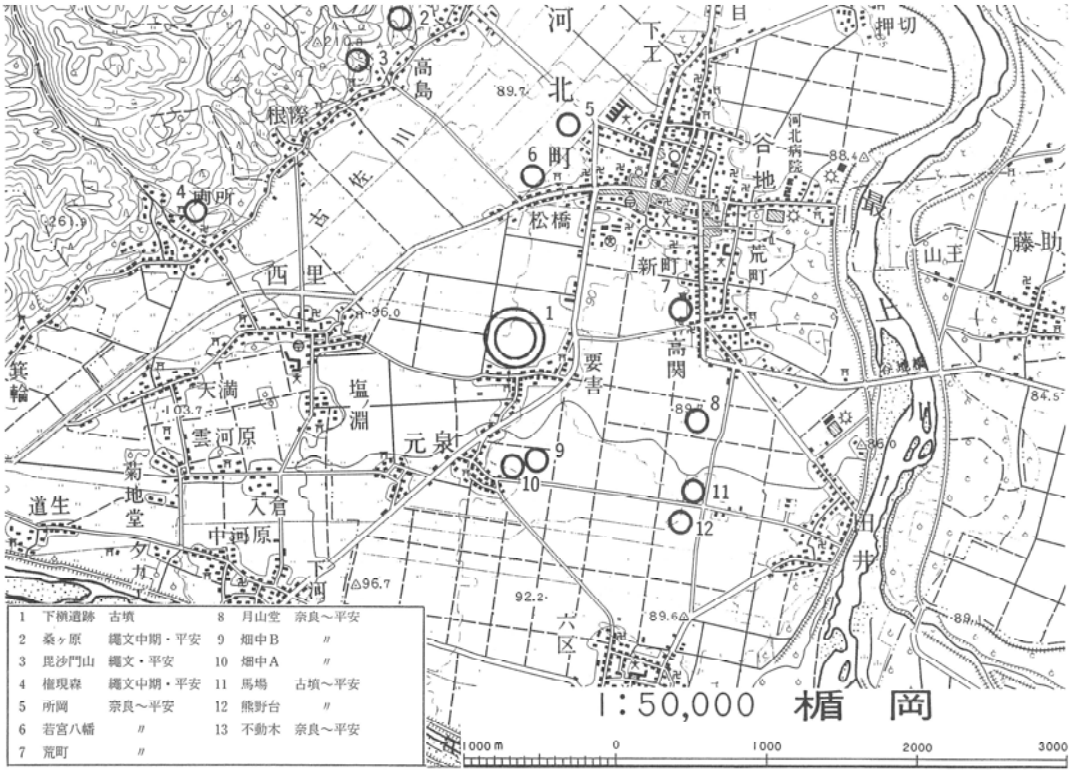
第1図　下槇遺跡位置図
第2図　遺跡全体図 …… 1
第3図　基本層序 …… 2
第4図　A・B地区遺構配置図 …… 3
第5図　第1号住居跡・出土遺物 …… 7
第6図　第5号住居跡・出土遺物 …… 8
第7図　第5号住居跡出土遺物 …… 9
第8図　第6・7号住居跡 …… 10
第9図　第7・10号住居跡出土遺物 …… 11
第10図　第10号住居跡・出土遺物 …… 12
第11図　第9号住居跡・出土遺物 …… 13
　　第4号住居跡出土遺物
第12図　C地区遺構配置図 …… 14
第13図　土師器分類図 …… 17
第14図　土師器分類図 …… 18
第15図　石製模造品実測図 …… 19

付　表

第1表　検出住居跡一覧 …… 5
第2表　検出住居跡一覧 …… 6
第3表　遺構内出土土器観察表 …… 16
第4表　土師器分類基準表 …… 17

図　版　目　次

図版1　下槇遺跡遠景・土層セクション・有孔円板出土状況・子持勾玉出土状況
図版2　AB地区平面プラン検出状況・第1号住居跡・第1号住居跡RP10出土状況
図版3　第5号住居跡・第5号住居跡遺物出土状況・同・石製垂飾品出土状況・遺物出土状況・セクション
図版4　第4号住居跡セクション・第6号住居跡・第9号住居跡
図版5　第7号住居跡・第7号住居跡カマド付近遺物出土状況・第10号住居床面直上遺物出土状況・第10号住居跡
図版6　出土遺物　壺
図版7　出土遺物　坩・坏・器台・鉢・高坏
図版8　出土遺物　甑・壺・石製垂飾品・子持勾玉・石製有孔円板



第1図　下槇遺跡位置図・周辺の遺跡

I　調査の経過

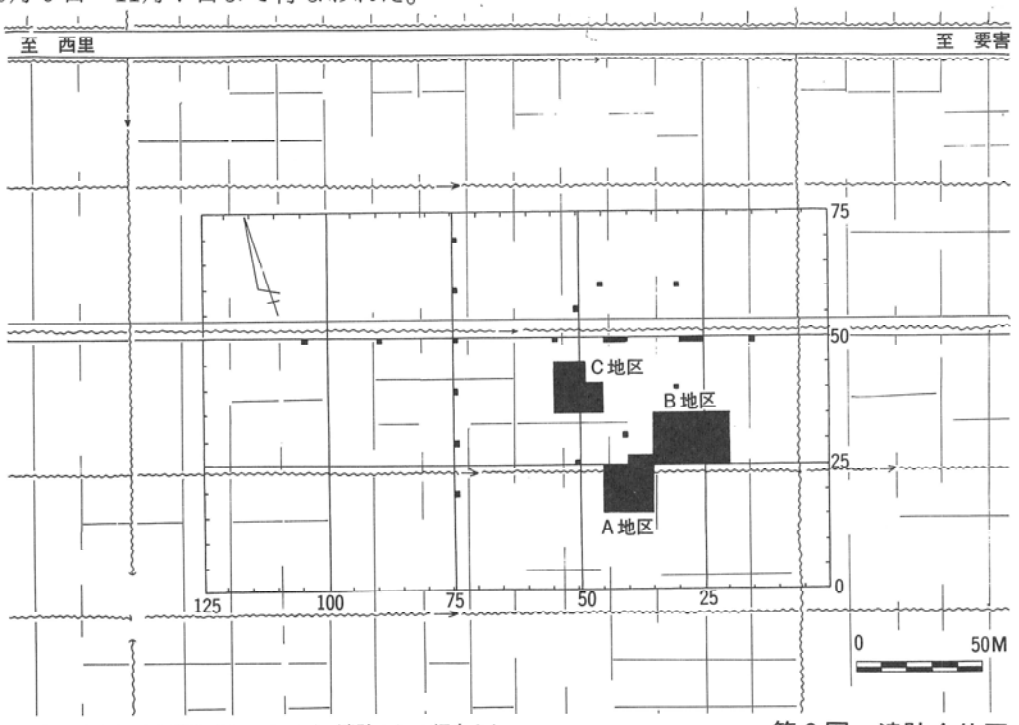
1　調査に至る経過

下槇遺跡は、山形県西村山郡河北町大字下槇字砂田に位置する。遺跡は、古くから古墳時代の土器が出土することで知られており、「土師式土器集成」・「山形県史」（文献）にも、出土した資料が紹介されている。(註)この地域に昭和55年度、山形県営圃場整備事業が実施されることになり、山形県教育委員会では、昭和54年秋、現地確認調査を行なった。その結果、古墳時代の集落跡であることが推定されたため、県教育委員会では、村山西部土地改良事務所・大堰土地改良区・河北町教育委員会等関係諸機関と協議をし、事前に緊急発掘調査を行なうことになったものである。調査は、昭和55年10月６日～11月７日まで行なわれた。

2　調査の経過

調査は、はじめ調査対象地区に２×２Ｍの坪掘りないし２×10Mのトレンチを25区入れ、遺構・遺物の分布状況を確認した。グリッドの基軸は、圃場整備計画の圃場方向に一致させた。Ｙ軸はＮ－17°－Ｅを計る。調査区西側は、遺構面まで極めて浅く、土師器片が数点出土したにとどまる。南東部は遺構が良く残っており、古墳時代の竪穴住居跡・土壙・溝跡などが検出された。確認掘りは調査開始３日間で終了し、４日目からは重機を用い、精査地区の拡張・精査に入った。拡張面積は総計で約1400㎡である。

連日の降雨で調査は難行したが、10月31日には現地説明会を催し、多数の参加を得、11月７日　延23日間の調査を終えた。



第２図　遺跡全体図

（註）『土師式土器集成』では、西里遺跡として紹介されているが同一遺跡である。

II　遺跡の概観

1　立地と環境

吾妻連峰に源を発し、米沢盆地・山形盆地を潤しながら北流してきた山形県の大動脈最上川は徐々に川幅を増しながら河北町をも潤しつつさらに北上する。朝日山系に源を発する寒河江川はその本流、最上川と河北町で合流する。最上川右岸には遠く奥羽山脈がそびえ、左岸には出羽丘陵が間近にせまる。南に寒河江川、東に最上川、北西部を出羽丘陵に囲まれた三角形の平地は古来より西河川の氾濫源であり、又、見事な水田地帯であった。

下槇遺跡一帯は寒河江川の扇状地で、東方向に緩やかな勾配を示し、標高は約91Mを測る沖積平野である。現在、地目は水田、一部畑地となっている。寒河江川扇状地北半の標高90Mライン添いには下槇遺跡を始め、古墳～平安時代の遺跡が数多く分布している。(第1図) このうち、古墳時代の遺物が確認されているのは、下槇・熊の台(註1)・馬場(註2)の3遺跡だけである。

2　遺跡の概要

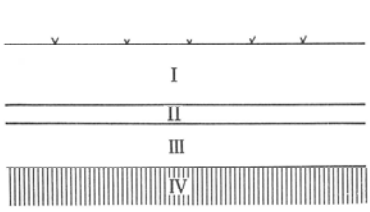
下槇遺跡は、「山形県遺跡地図」(昭和53年・山形県教育委員会) には、古墳時代の遺跡として登録されている。今回の調査は古墳時代の遺構・遺物の集中する地区を中心に3地区、計約1400m²の精査地区を設定した。なお、確認掘りの段階で、調査対象地区西側から奈良時代および、平安時代の須恵器片が数点、又、北側の県道の北西部より、弥生式土器片・石器が数点出土した。

精査地区についての概略は次の通りである。

A地区　竪穴住居跡4棟・土壙1基検出。いずれも古墳時代のものである。1号住居跡床面より埋設土器、4号住居跡覆土より滑石製垂飾品が1点出土した。

B地区　竪穴住居跡5棟・溝跡を検出。5号住居跡覆土・10号住居跡床面直上より土師器が一括出土し、5号住居跡の同じ覆土層から石製垂飾品1点が出土した。

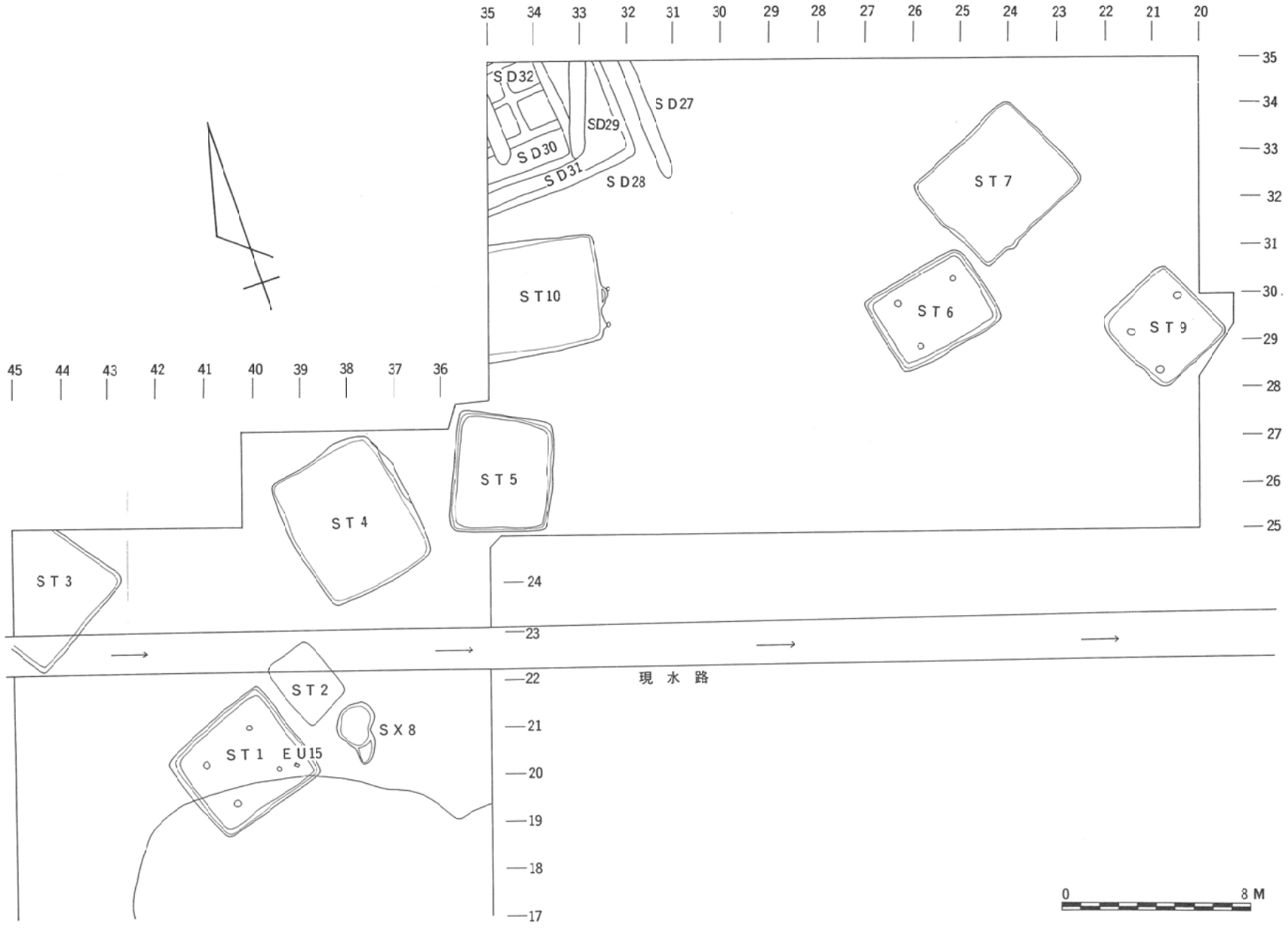
C地区　溝跡・ピットを検出。住居跡は検出されなかった。IV層直上より子持勾玉、有孔円板が各1点ずつ出土した。



I層　暗褐色耕作土　水田の耕作土で、土層の厚さは15～20㎝。
II層　黒褐色粘質微砂　若干の炭化粒子を含む。わずかに平安時代の遺物が出土する。
III層　暗褐色粘質微砂　古墳時代の遺物包含層。炭化粒子を若干含む。
IV層　青灰色微砂質土　無遺物層で、ほとんどの住居跡の床面・壁を形成する。土層の厚さは30～40㎝。IV層下位には黒褐色グライ層が厚く堆積する。

第3図　土層図

(註1)　山形県埋蔵文化財報告書第31集「熊野台遺跡」・1980
(註2)　河北町埋蔵文化財報告書第1集「馬場遺跡」・1980



第4図 A・B地区遺構配置図

III　遺構と遺物

1　遺構　（A・B地区）

下槇遺跡の調査面積（精査面積）は、約1400㎡である。このうち、竪穴住居跡が検出されたのは南側A・B地区（約1000㎡）で、確認された9棟は、重複関係がなく、極めて良好な状態で残っていた。このうち、発掘し得たものが8棟、第2号住居跡としたものについては、現水路により大半が攪乱されているため一部プランの確認で終えた。

A地区南側約3分の1は、後世（かなり新しい時期）の天地返しで大部分が攪乱されていたが、他は水路部分を除いてほとんど攪乱はみられなかった。

住居跡以外の遺構としては、第1号住居跡東側に性格不明落込み遺構1基、B地区北西部に、巾30～40㎝程の約1㎡間隔の格子状の溝跡が検出された。調査期間の都合上、プランの確認のみで発掘はできなかった。

各遺構は、IV層直上でプランの確認ができた。遺構覆土は上層で第III層とほぼ同じ暗褐色粘質微砂土で、炭化粒子や焼土を若干含むため、平面プランの段階では容易に識別できた。

住居跡は、一辺が4～6ｍの方形プランを呈し、方向は、第5号住居跡・第10号住居跡がややN→Eであるのを除き、他はほぼ磁北と一致する。壁は第IV層を20～35㎝掘り込んでおり、第5号住居跡は貼床の可能性が考えられる。壁溝は、第1・5・6号住居跡で検出され、カマドは第7号住居跡でのみ確認された。第1号住居跡床面では2ケ所（径50㎝・30㎝）に焼土が検出された。炉跡の可能性をもつ。床面は、第5号住居跡を除き、第IV層又は第V層上面に構築されており、柱穴は第1・6・9号住居跡で検出された。

覆土の状態は、レンズ状の堆積をみる第1・5号住居跡、レンズ状の堆積で第2ないし第3層に黒褐色シルト層を含む第4・6・7・9号住居跡、第5層に黒褐色シルトを含む第10号住居跡、レンズ状の堆積がみられない第3号住居跡の4種に大別できる。床面及び壁際に焼土・炭化材が第3・7号住居跡で認められ、この2棟については焼失家屋の可能性も考えられる。床面直上には、第4号住居跡で床北西部に、第5号住居跡で床北壁際に、第9号住居跡床北壁際にそれぞれ100㎝四方前後の炭化物（アンペラ状）が検出された。

各住居跡については、第1・2表に各項目別に、簡略に記載した。尚、遺構内出土遺物は、細片が多いため、特徴的なもの、実測し得たものについてのみ各住居跡ごとに記載し、細片については総数を付した。

検出住居跡一覧

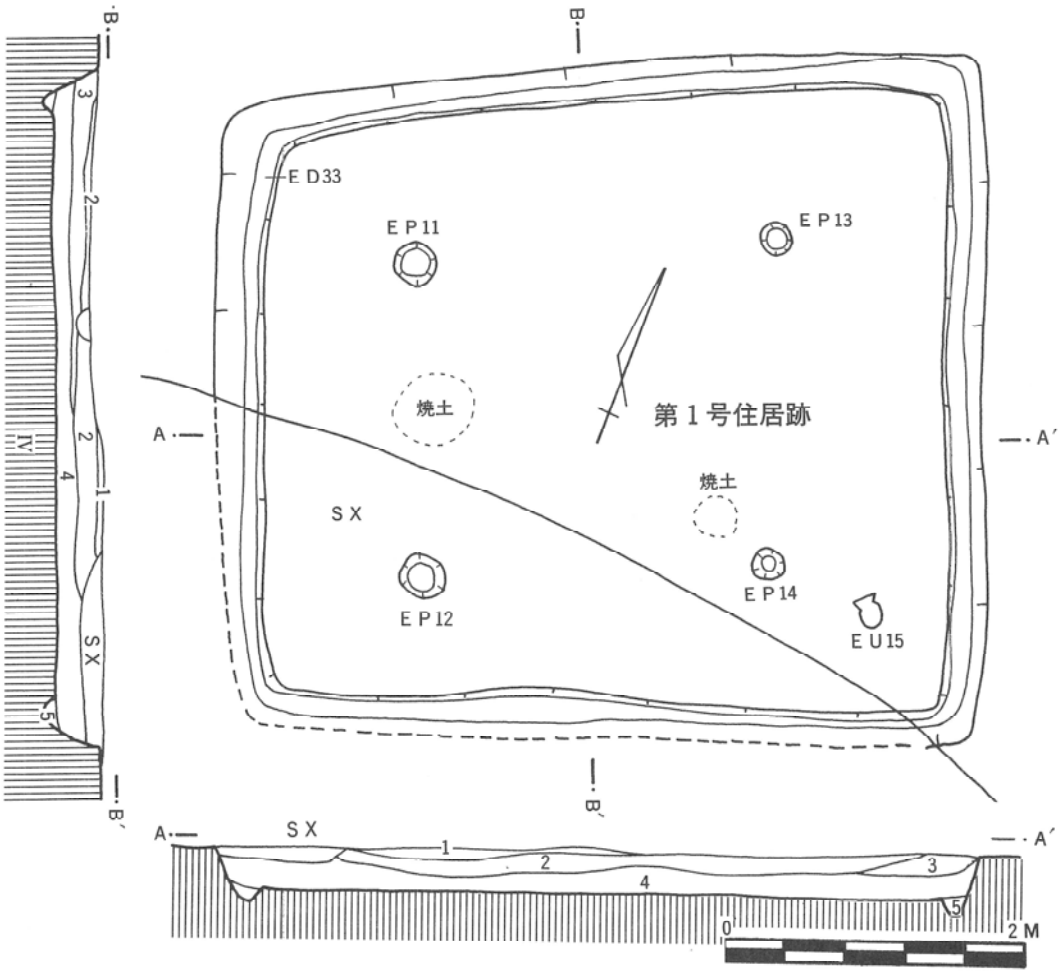
	第1号住居跡(第5図・図版2)	第3号住居跡	第4号住居跡(図版4)	第5号住居跡(第6図・図版3)
地区	39～42—19～22グリッド	43～46—22～26グリッド	37～40—24～28グリッド	34～36—26～28グリッド
遺存状況	IV層直上でプラン検出。南側約⅓が後世の攪乱により破壊されている。床面は明瞭に残存。	IV層直上でプラン検出。西側約½は、調査区の関係で未検出。	IV層直上でプラン検出。遺存状況は良好。	IV層直上でプラン検出。遺存状況は良好。
平面形規模方向	隅丸方形 東西508cm　南北446cm	隅丸方形 東西500cm南北500cm(推定)	隅丸方形 東西525cm　南北610cm	隅丸方形 東西435cm　南北496cm
壁の状態	第IV層を20～30cm掘り込み、やや急な立上りを示す。	第IV層を20cm掘り込み、やや急な立上りを示す。	第IV層を25～30cm掘り込み、やや急な立上りを示す。	第IV層を20～25cm掘り込んでいる。やや急な立上りを示す。
壁溝	壁に沿い全周する。 巾15～20cm・深10cm。 断面はU字形を示す。	検出されず	検出されず	壁に沿い全周する。 巾10～20cm、プラン確認のみで未掘。
床	第IV層を床面とし、平坦でしまっている。	第IV層を床面としている。平坦だが、しまりは弱い。	第IV層を床面としている。平坦だが、しまりは弱い。	掘り込み地業による貼り床の可能性が考えられる。
柱穴	明瞭に検出。 ＥＰ11・12・13・14	検出されず	検出されず	検出されず
炉 カマド	床面中央部西側に径50cm、北東部にも径30cmの焼土が検出された。いずれも床面直上。	検出されず	検出されず	検出されず
覆土の状態	4層に分かれる。 レンズ状の堆積。	4層に分かれる。レンズ状の堆積はみられず。	4層に分かれる。レンズ状の堆積。第2層は黒褐色シルト（遺物はほとんど含まない。）	4層に分かれる。 第2層及び第3層から土師器が一括出土した。
その他	住居跡床面南東部隅で、楕円形(長軸30cm、短軸20cm、深さ30cm）の掘り方をもつ埋設土器（ＲＰ10）が出土。	住居跡東側床面直上に炭化物・炭化材の散布がみられる。 焼失家屋の可能性も考えられる。	住居跡北西部床面に、一部炭化した有機物（アンペラ状）が認められる。	住居跡北壁際床面直上にワラ状の炭化物が150cm四方に散布。
出土遺物	土器総数　715片 覆土第1層～第2層から集中的に土器片が出土。これらは時期決定資料とは成り得ず。 〈時期決定資料〉 ＲＰ10（壺6類）床面を掘り込んで横位の状態で出土。(第5図1)	土器総数　27片 覆土第1層～第2層からのみ出土。形態の判明する土器片は認められず。覆土第2層より、高坏1または2類と考えられる器種の坏部（丹塗）が破片で出土したにとどまる。	土器総数　1320片 ほとんどが、覆土第1層～2層からの出土である。床面出土の鉢2類、坏3類を除き、細片が大部分を占める。壺5類数片が判明したのみである。 石製品ＲＱ9（第15図2）が覆土2～3層より出土。 〈時期決定資料〉 ＲＰ63(鉢2類)(第11図27) ＲＰ64(坏3類)(第11図26)	土器総数　990片 覆土第2層～3層から集中的に出土。覆土第1層からは壺4・5類の出土もみられる。覆土2～3層出土土器については、第3表参照。石製品ＲＱ8（第6図2） 〈時期決定参考資料〉 ＲＰ20(壺1類)(第7図5) ＲＰ65(壺2類)(第7図6) ＲＰ31(壺3類)(第7図7) ＲＰ32(壺3類)(第7図8)

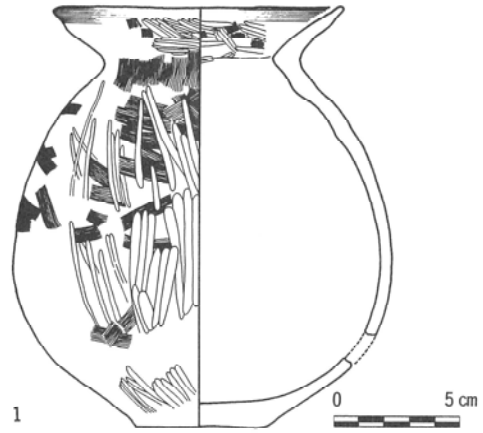
第1表　検出住居跡一覧

検出住居跡一覧

	第6号住居跡(第8図・図版4)	第7号住居跡(第8図・図版5)	第9号住居跡(第11図・図版4)	第10号住居跡(第10図・図版5)
地区	25～28—29～31グリッド	23～26—31～34グリッド	20～22—29～31グリッド	33～36—28～32グリッド
遺存状況	IV層直上でプラン検出。遺存状況は良好。	IV層直上でプラン検出。遺存状況は良好。	IV層直上でプラン検出。遺存状況は良好。	IV層直上でプラン検出。遺存状況は良好。西側約¼は、調査区の関係で未検出。
平面形規模方向	隅丸方形 東西482cm　南北362cm	隅丸方形 東西570cm　南北462cm	隅丸方形 東西380cm　南北400cm	隅丸方形 東西550cm(推定)南北480cm
壁の状態	第IV層を20cm程掘り込み、ややゆるやかに立上る。	第IV層を25cm掘り込み、やや急な立上りを示す。	第IV層を15～20cm掘り込み、ゆるやかな立上りを示す。	第IV層を20～35cm掘り込み、ゆるやかな立上りを示す。
壁溝	壁に沿い全周する。 巾15～20cm　深8～10cm。 断面はU字形を呈す。	検出されず	検出されず	検出されず
床	第IV層を床面としている。平坦でややしまっている。	第IV層を床面としている。平坦でややしまっている。	第IV層を床面としている。平坦でしまっている。	第V層上部を床面としている。 ややしまりがある。
柱穴	南東隅の柱穴は未検出。 EP19・20・21	検出されず	南東隅の柱穴は未検出。 EP24・25・26	検出されず
炉カマド	検出されず	東壁南側隅よりカマド(EL23)検出。粘土構築。	検出されず	検出されず
覆土の状態	5層に分かれる。レンズ状の堆積。第2層はST4・7・9と同様黒褐色シルトが堆積。	7層に分かれる。レンズ状の堆積。ST4・6・9と同様に、第2層は黒褐色シルトが堆積。	5層と分かれる。第3層にST4・6・7と同様、黒褐色シルトが堆積。	7層に分かれる。 第5層にうすく黒褐色シルトが堆積。
その他		覆土第5層(壁際に堆積)に、多量の焼土・炭化物が含まれ、壁際から50～160cmの幅で住居跡内側全周を囲む。炭化材の散布も認められる。焼失家屋か。	北側壁中央部に、約100cm四方の範囲で、床面直上に炭化物の散布がみられる。	住居跡東壁南側に、120cm隔て壁外側にピットが2基張り出す。
出土遺物	土器総数　280片 ほとんどが細片である。壺・高坏の器種が認められる。覆土第2層及び第3層からは、壺5類が出土している。 〈時期決定参考資料〉 覆土第3層　壺5類	土器総数　270片 覆土第3層より壺3類・坏3類が出土。第3層～4層より高坏4類・壺3類が出土している。 壁際第5層より坩2類・高坏1類の出土が認められる。覆土第1層より、底部に墨書痕の認められる須恵器坏片(底部切離し、回転糸切)が1点出土。 〈時期決定資料〉 RP66(坩2類)(第9図17)	土器総数　270片 ほとんどが細片である。覆土第2～3層より壺5類の出土がみられる。 〈時期決定資料〉 RP67坏1類(第11図24) RP68坏2類(第11図25)	土器総数　360片 床面直上出土で、実測なし得た土器が5点ある。いずれも床直上ないし覆土第7層出土である。 〈時期決定資料〉 RP41(高坏1類)(第10図21) 7号住居跡カマド内出土、 RP36(高坏裾部)と接合 RP37(鉢1類)(第10図22) RP38(器台1類)(第10図23) RP44(壺7類)(第9図20) RP48(甑1類)(第9図19) RP44・48はセットで出土

第2表　検出住居跡一覧





第１号住居跡　床面下出土土器

器面外側全面に丹塗が施される

第１号住居跡土層

F１　黒褐色粘質微砂（青灰色砂を少量含み、粘性が強い。）

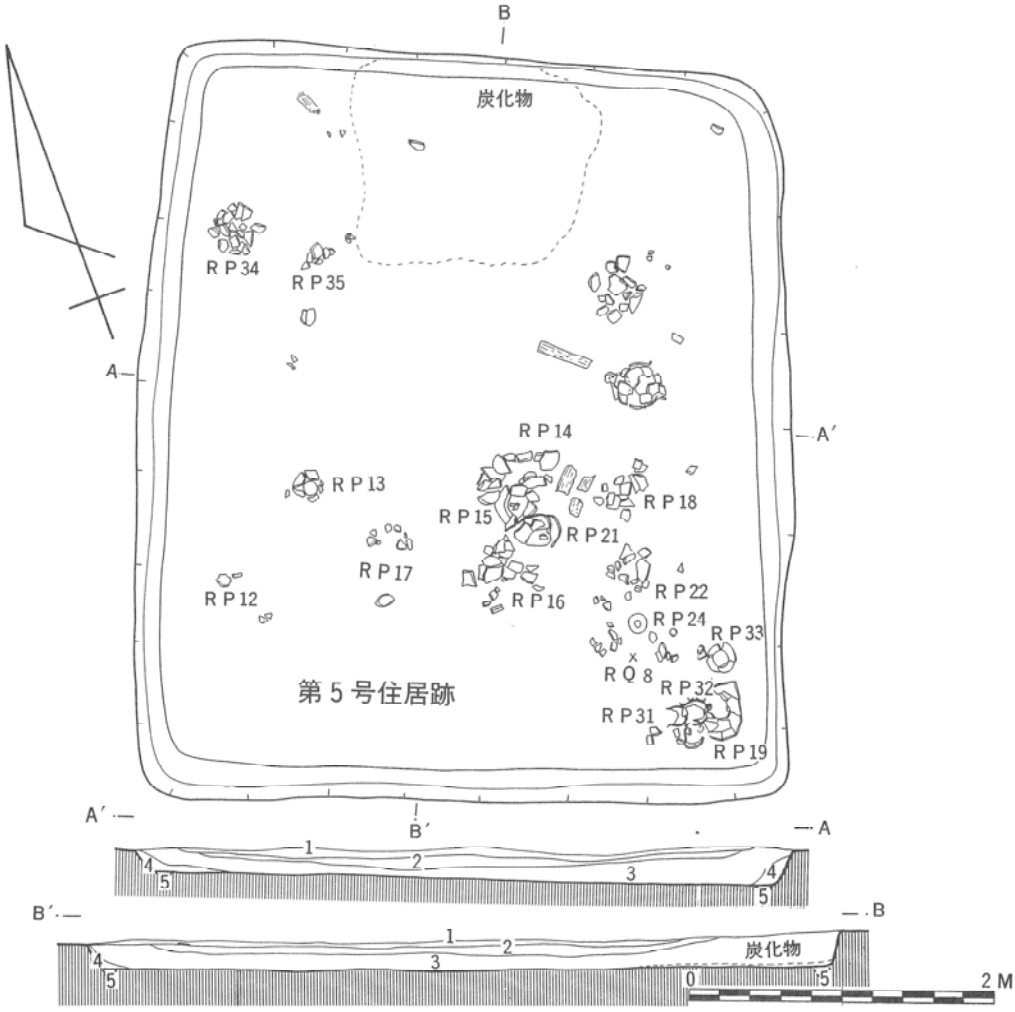
F２　暗青灰色砂質微砂(青灰色シルトを多量に含み、しまりがある。)

F３　晴青灰色粘質微砂（青灰色シルトをあまり含まず、やわらかい。）

F４　晴青灰色粘質土（炭化粒子を若干含む。）

F５　晴青灰色粘質土（炭化粒子を若干含む。）

第５図　第１号住居跡



第5号住居跡土層

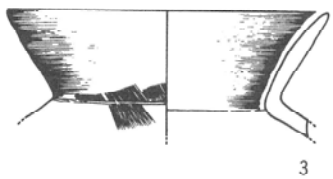
F1　黒褐色粘質微砂（多量の炭化物・有機質粘子を含む）

F2　暗褐色粘質微砂（多量の土器を包含する）

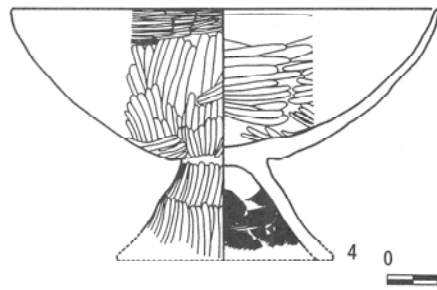
F3　〃　（F2よりやや暗く、微量の炭火粒子を含む。土器を包含する。）

F4　暗青灰色砂質土（壁際に青灰色シルトを含む）

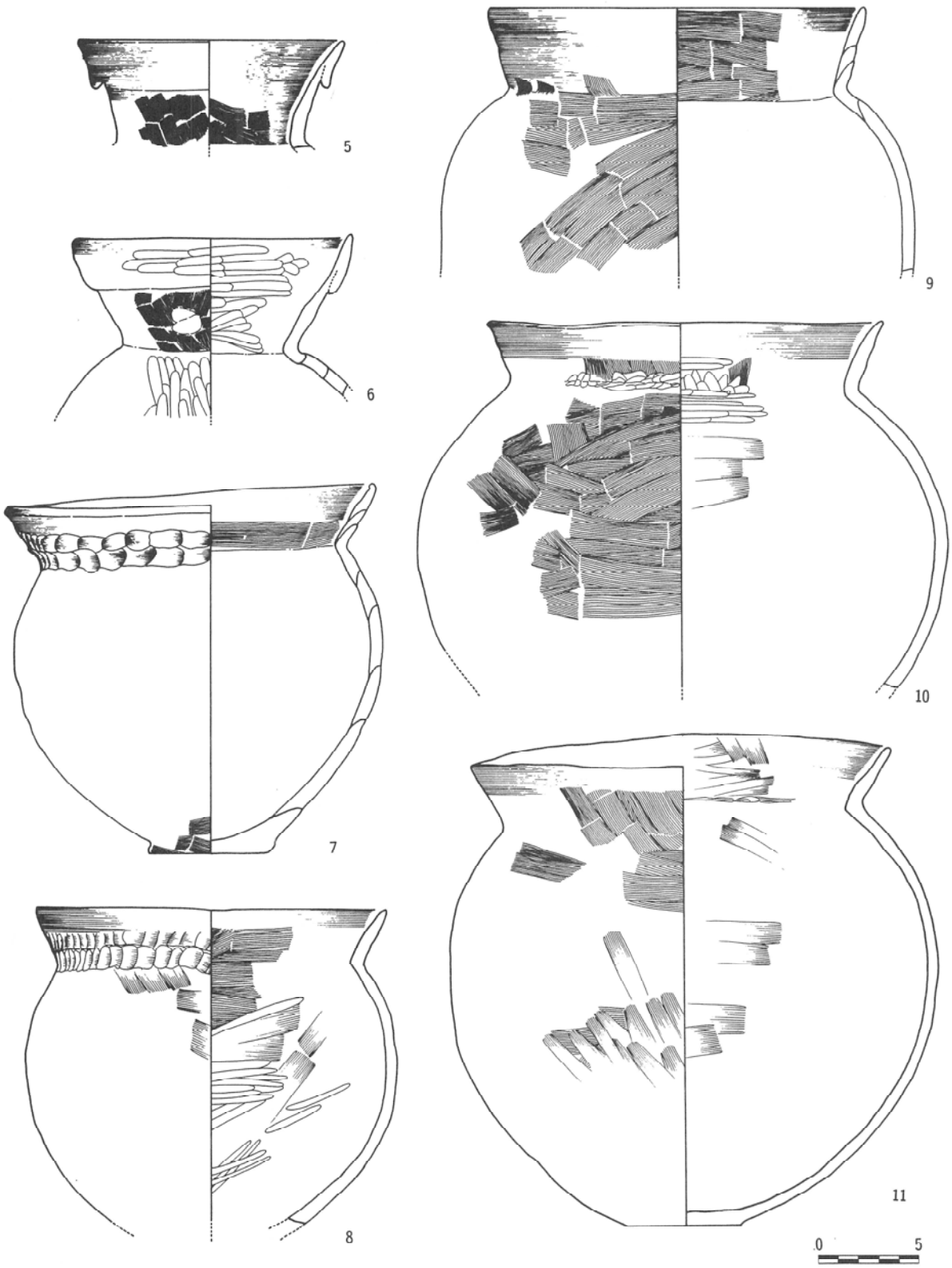
F5　暗褐色粘質微砂（F3とほぼ同様）



第5号住居跡出土土器

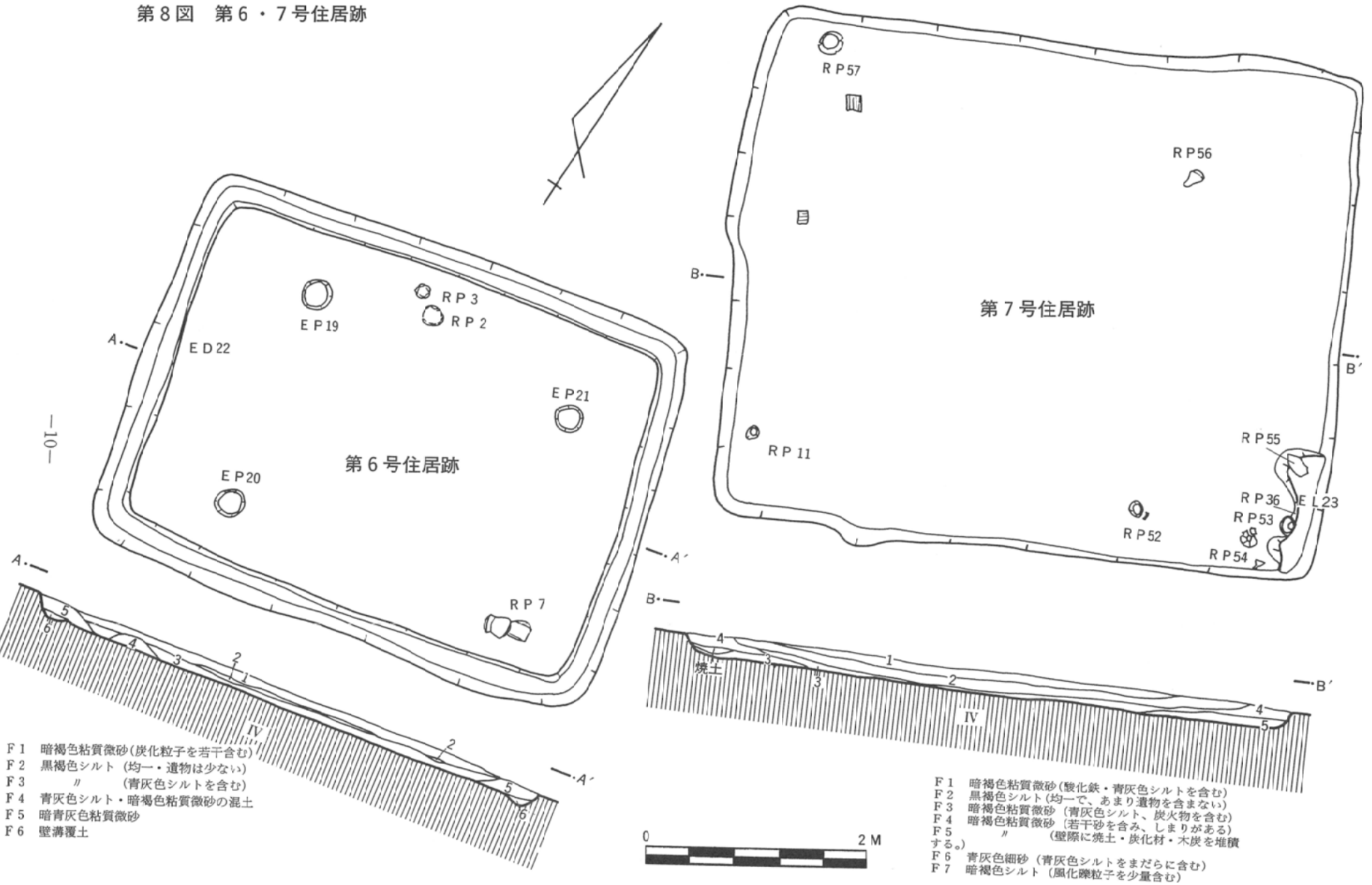


第6図　第5号住居跡



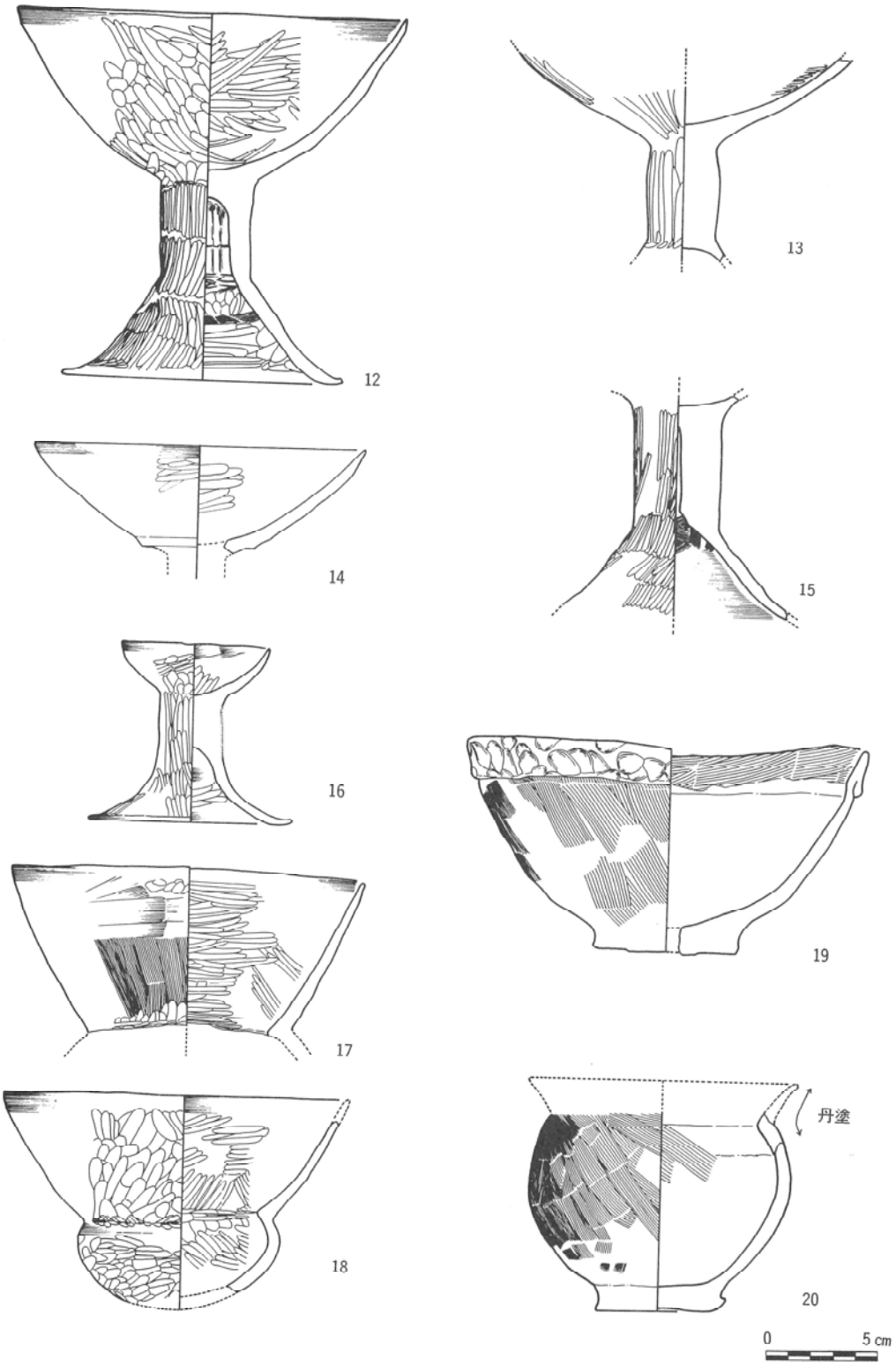
第7図　第5号住居跡出土土器

第８図　第６・７号住居跡



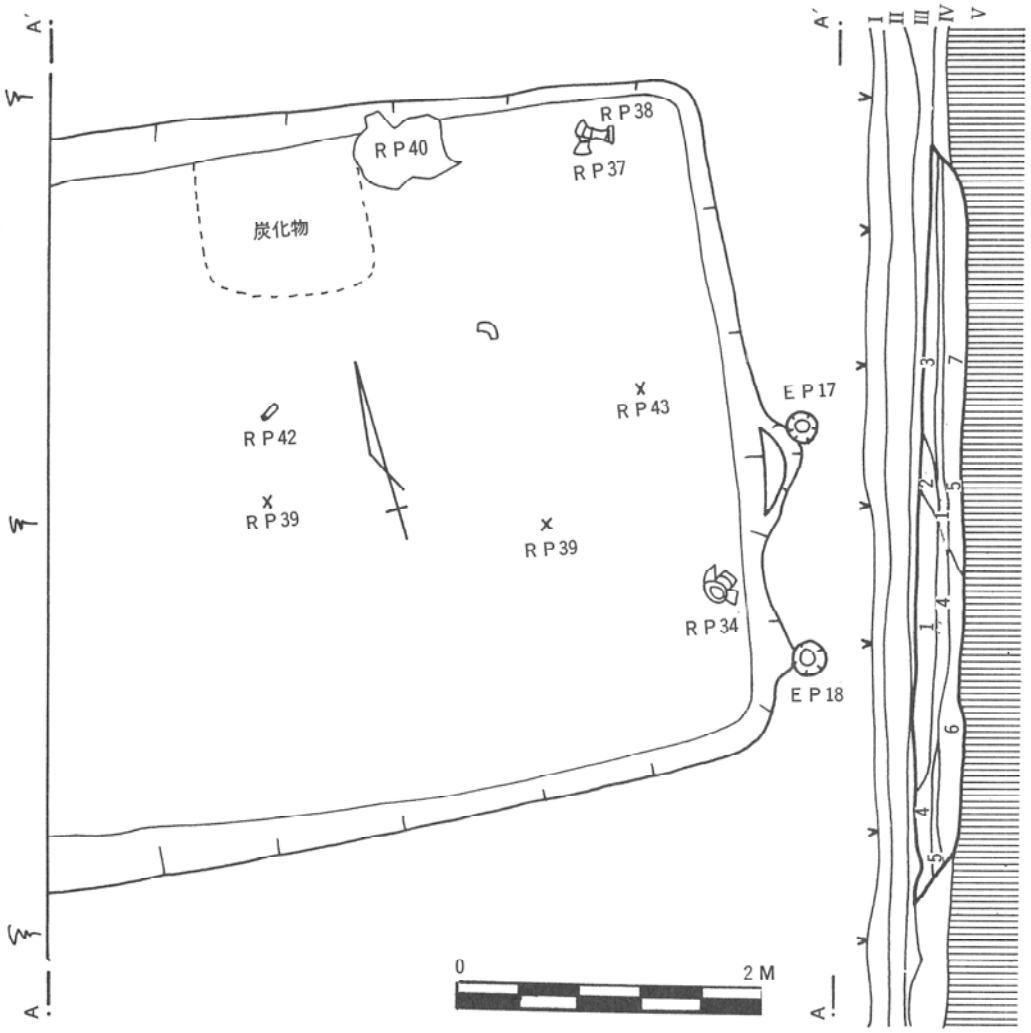
F１　暗褐色粘質微砂(炭化粒子を若干含む)
F２　黒褐色シルト（均一・遺物は少ない）
F３　〃　（青灰色シルトを含む）
F４　青灰色シルト・暗褐色粘質微砂の混土
F５　暗青灰色粘質微砂
F６　壁溝覆土

F１　暗褐色粘質微砂(酸化鉄・青灰色シルトを含む)
F２　黒褐色シルト(均一で、あまり遺物を含まない)
F３　暗褐色粘質微砂（青灰色シルト、炭火物を含む)
F４　暗褐色粘質微砂（若干砂を含み、しまりがある)
F５　〃　（壁際に焼土・炭化材・木炭を堆積する。)
F６　青灰色細砂（青灰色シルトをまだらに含む)
F７　暗褐色シルト（風化礫粒子を少量含む)



12～18・第7号，19・20第10号住居跡

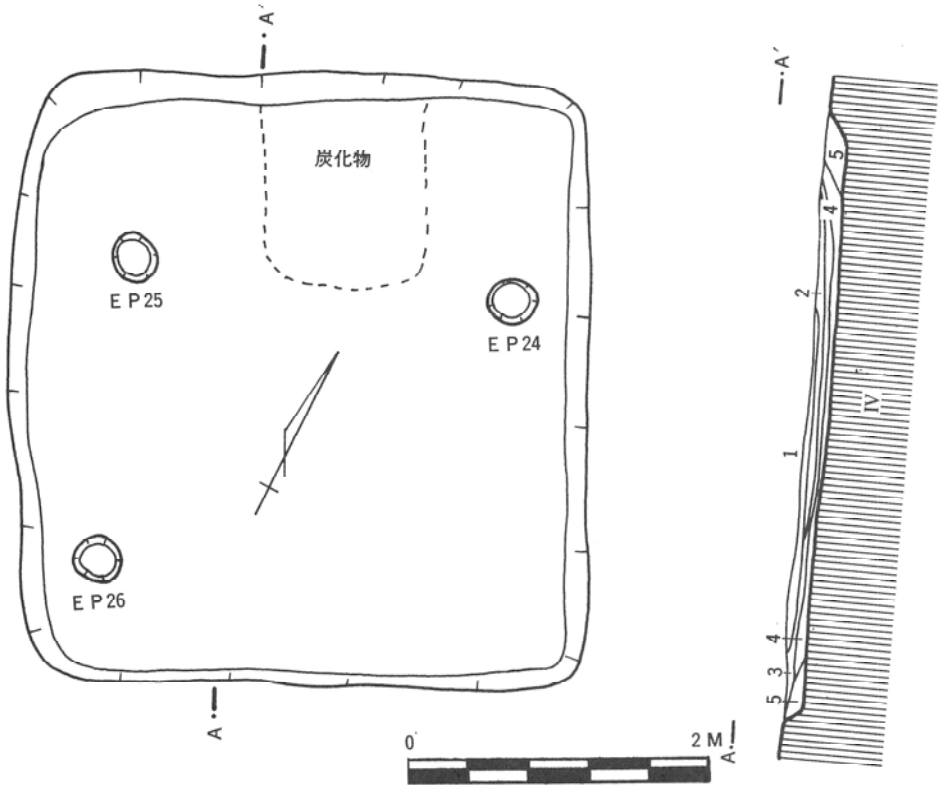
第9図　第7号・10号住居跡出土土器



第10号住居跡土層

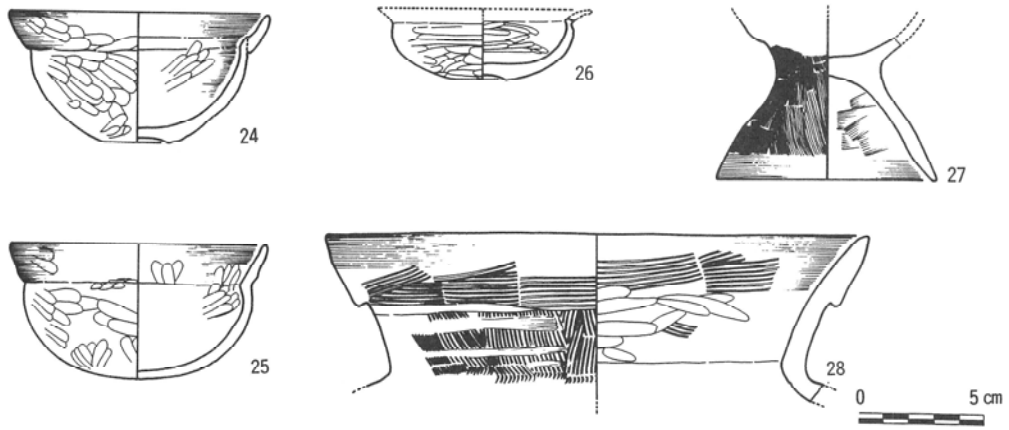
F 1	青灰色粘質微砂(青灰色シルト・炭化粒子を含む)	F 4	青灰色粘質微砂(青灰色シルト・炭化物を若干含む)
F 2	暗褐色粘土質シルト(青灰色シルトを若干含む)	F 5	黒褐色シルト質粘土(炭化物を大量に含む)
F 3	〃 (若干の青灰色シルトを含む)	F 6	暗褐色シルト質粘土(青灰色シルトを若干含む)
		F 7	〃 (F 6より青灰色シルトが多い)

第10図　第10号住居跡



第9号住居跡土層

F 1　暗褐色粘質微砂（酸化鉄・青灰色シルトを含む）
F 2　〃　（F 1より色調が黒っぽい）
F 3　黒褐色シルト（均一であまり遺物を含まない）
F 4　暗褐色粘質微砂（青灰色シルト・炭化粒子を含む）
F 5　〃　（青灰色シルトを含み、しまりがある）



第11図　第9号住居跡・出土土器（24・25）　　第4号住居跡出土土器（26～28）

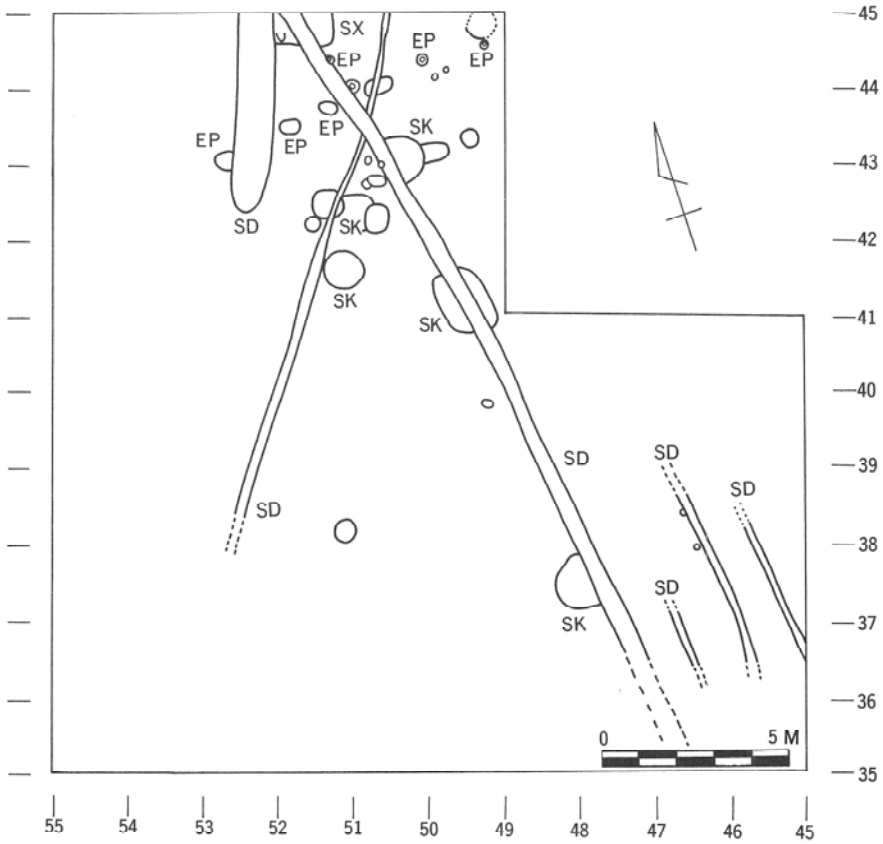
2　遺構　（C地区）

C地区の精査面積は336㎡である。試掘の段階で44—54グリッドIV層直上において石製有孔円板・42—50グリッドにおいて子持勾玉が出土し、また、41—51グリッドで拳大の礫が径30㎝のマウンド状態で検出されたため精査地区として拡張したものである。

調査期間の都合上、平面プランの確認で調査を終えざるを得なかった。プランはIV層直上ですべて確認された。検出された遺構は、溝跡・土壙・ピットなどがある。住居跡は検出されなかった。溝跡は6基確認されたが、そのうち4基は磁北と方向がほぼ一致する。土壙は6基確認された。溝跡・土壙については、その性格は不明である。ピットは約20程検出されたが、柱列構成はできず、やはりその性格については不明である。

C地区は、前述の通り、石製有孔円板・子持ち勾王が出土、マウンド状の礫が検出されたため、何らかの形で祭祀に関連する地区の可能性が考えられるが、これら遺物と直接結びつく遺構は検出されなかった。

遺物はIV層直上・III層下部で若干出土したが、ほとんど細片である。40—50グリッドIV層直上より、甑1類、高坏1類が各1点出土した。



第12図　C地区検出遺構

3　遺物

下槇遺跡から出土した遺物には、土器・土製品・石製模造品・自然遺物などがある。包含層出土遺物と遺構内出土遺物はほぼ同数で、総数では整理箱にして約30箱程である。細片が多いことから、ここでは図上復元も含め、実測し得たものを主に扱う。

（土器及び土製品）

下槇遺跡で認めた器種には、壺・高坏・器台・坏・坩・甑・鉢の7種類がある。ほとんどが土師器である。これらは、形態・口縁部あるいは体部・脚部の成形、調整技法などの諸属性をもとに7器種21類に細分できる。尚、これらはすべて竪穴住居覆土内出土または床面出土のものに限定した分類である。（第4表　土師器分類基準表）

特に5号住居跡覆土・7号住居跡床面・カマド・床面直上・10号住居跡床面直上から、完形、もしくは図上復元可能な土器が比較的多量に出土した。これらは、時期的には東北地方南半における古墳時代前期「塩釜式」に併行関係を有するもの、この時期に後続すると考えられる古墳時代中期「南小泉II式」に併行関係を有するものの2つに大別できる。

土製品としては、7号住居跡覆土第2層より土玉、第4層よりカマド支脚が各1点づつ出土した。

（石製模造品）

特色のある遺物が出土している。C地区包含層から子持ち勾玉、有孔円板が各1点づつ出土した。A・B地区第4号住居跡覆土、第5号住居跡覆土第2層からは、いわゆる「琴柱型石製品」の範疇に入ると考えられる「石製垂飾品」が2点検出された。形態・大きさ・線刻もほとんど同様であり、5号住居跡出土のものがより精巧であり（註3）4号住居跡出土のものが粗雑な作りであることから、後者は前者の模倣であることも考えられる。

（自然遺物）

包含層より桃の種子、3号住居跡覆土、7号住居跡覆土より炭化した植物の種子が数点出土した。3号住居跡・7号住居跡からは炭化材が検出されている。

土器については、分類表をもとに、本報告書に掲載したすべての土師器について、各遺構・覆土別に観察表を付した。本遺跡における土器は、住居跡内出土にものについては、ある程度セット関係が把握できると考えられるが(IV・まとめ)、型式の認定についてはさらに検討を要する。

（註3）『東京国立博物館紀要　第八号　琴柱型石製品考』亀井正道　1972

遺構内出土土器分類表

出土遺構	出土層	分類記号	挿図番号	口縁部(高坏は坏部, 器台は受部を示す) 内面	口縁部(高坏は坏部, 器台は受部を示す) 外面	体部(高坏, 器台は脚部を示す) 内面	体部(高坏, 器台は脚部を示す) 外面	備考
	覆2	坏 3		欠損	欠損	ミガキ	ミガキ	
1住	床面下	壺 6	1	ハケ目→ミガキ ナデ	ハケ目→ミガキ ナデ	不明	ハケ目 1部ミガキ	外面に丹塗りが施されている。体部下半に1個の孔を有する。床面を掘り込み横位で出土。
	覆2	壺 2	28	ナデ	ハケ目・ナデ	欠損	欠損	口唇部に約3ミリ間隔で
4住	床面	坏 3	26	欠損	欠損	ミガキ	ミガキ	
	〃	鉢 2	27	欠損	欠損	ナデ	ハケ目・ナデ	口縁部～体部欠損。台部のみ残存。
	覆2	壺 4	9	ハケ目・ナデ	ナデ	不明	ハケ目	体部下半欠損。
	〃	壺 5	11	ナデ・ミガキ	ハケ目・ナデ	ナデ	ハケ目	体部下部3分の1欠損。
	〃	〃	10	ナデ	ハケ目・ナデ	ナデ	ハケ目	
	〃	〃	3	ナデ	ナデ	欠損	欠損	
5住	〃	高坏 2	4	ミガキ	ミガキ	ハケ目	ミガキ	脚部の裾部1部欠損。
	覆2～3	壺 1	5	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	欠損	欠損	
	〃	壺 2	6	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ			
	覆3	壺 3	7	ハケ目・ナデ	ナデ(3段)	不明	ハケ目?	挿図9と重なって出土。
	〃	〃	8	ハケ目・ナデ	ナデ(3段)	ナデ	ナデ・ミガキ	底部欠損。
	覆3	器台 2	16	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ナデ・ミガキ	ミガキ	
	覆3	高坏 4	14	ミガキ	ミガキ・ナデ	欠損	欠損	坏部下端に陵をもつ。
	覆5	坩 2	18	ミガキ・ナデ	ケズリ・ナデ	ミガキ	ケズリ・ミガキ	底部1部欠損。
7住	覆5	高坏 1	13	ミガキ	ミガキ	中実	ミガキ	裾部・坏部1部欠損。
	床面	高坏 3	12	欠損	欠損	ミガキ	ハケ目・ナデ	柱状部が中空（細い）となっている。
	カマド	高坏 3	15	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	シボリ	ミガキ	
	カマド内	坩 1	17	ミガキ・ナデ	ハケ目・ナデ	ハケ目→ミガキ 欠損	欠損	カマド内部より出土。
9住	床面	坏 1	24	ナデ	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ミガキ	体部成形後の口縁部接合痕が明瞭に残る。
	〃	坏 2	25	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ミガキ	ミガキ	
	床直上	甑 1	20	ハケ目	指ナデ	不明	ハケ目	底部単孔。挿図22と重なって出土。22が下位。
	〃	壺 7	19	ナデ(?)	ナデ(?)	ハケ目	ハケ目	口縁部～肩部に丹塗の痕跡が残る。
10住	〃	高坏 1	21	欠損	欠損	ハケ目・ナデ	ミガキ・ナデ	裾部は7号住居カマドより出土。接可した。
	〃	鉢 1	22	ハケ目	ハケ目	台部にシボリあり	ハケ目	挿図25と重なって出土。
	〃	器台 1	23	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ハケ目・ミガキ	ミガキ	

1　出土遺構　　1住　は、第1号住居跡を示す。

2　出土層　　覆1　は、覆土第1層を示す。

3　挿図番号は、第5図～第11図に示した挿図の各番号に一致する。

4　器面調整については、八ケ目・ミガキ・ナデ・ケズリ・シボリ等の調整を基本にした。

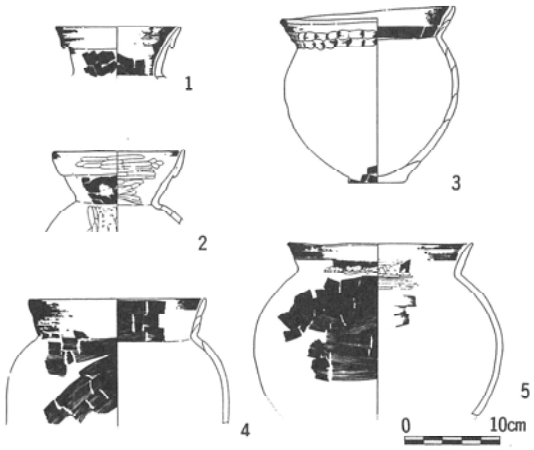
5　分類番号は、第4表　土師器分類基準表による。

第3表

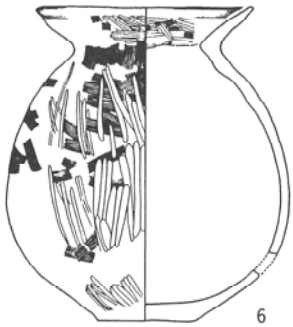
土師器分類基準表

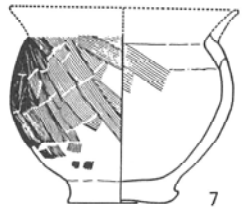
壺	1	複合口縁　口縁部はやや外反しながら直立する。体部は球形。	(第13図　1)
	2	複合口縁　口縁部は「く」字状でやや内彎する。体部は球形。	(第13図　2)
	3	単純口縁　口縁部は「く」字状で、ナデ・ヘラナデ・逆方向のヘラナデ（下2段はヘラの押引）	(第13図　3)
	4	単純口縁　口縁部が直立する。最大径は体部上半にある。	(第13図　4)
	5	単純口縁　口縁部は「く」字状で最大径は体部中央にある。	(第13図　5)
	6	単純口縁　口縁部が「く」字状にやや大きく外反する。最大径は体部下半。	(第14図　6)
	7	単純口縁　小型の壺で最大径は口縁部にある。	(第14図　7)
高坏	1	脚部一中実の柱状部＋裾部	(第14図　12)
	2	脚部一柱状部がなく、坏部からすぐ円錐台状に開く裾部をもつ。	(第14図　10)
	3	脚部一中空の柱状部＋裾部	(第14図　11)
	4	脚部一不明　坏部一下半に稜をもつ。	(第14図　13)
器台	1	皿状の器受部　脚部は円錐台状に広がる。3個の貫通孔を有する。	(第14図　8)
	2	坏状の器受部　脚部は柱状部と裾部からなる。貫通孔は有さない。	(第14図　9)
坏	1	口縁部が外反し、体部は丸みをもつ。平底。	(第14図　14)
	2	口縁部が外反し、体部は丸みをもつ。丸底。	(第14図　15)
	3	小型の坏で口縁部は外反し、体部の内彎が顕著である。底部外面に凹をもつ。	(第14図　16)
坩	1	小型丸底坩。口縁部がやや内彎しながら大きく開く。最大径口縁部。	(第14図　17)
	2	坩1に比してやや大型。口縁部が直線的に外へ開く。	(第14図　18)
甑	1	複合口縁の鉢形甑。底部単孔。	(第14図　19)
鉢	1	台付の小型鉢。口縁部は細かい波状を呈する。	(第14図　20)
	2	台付の小型鉢。体部不明。	(第14図　21)

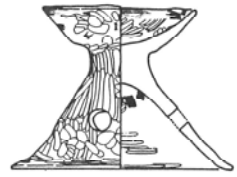
第4表

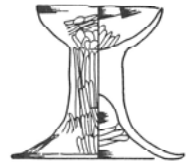


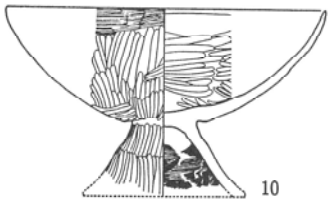
第13図　土師器分類図

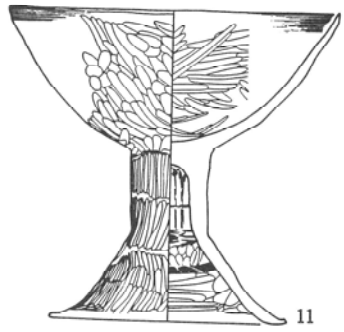

6

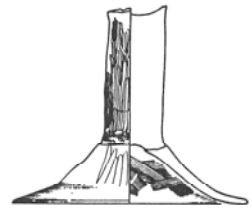

7


8

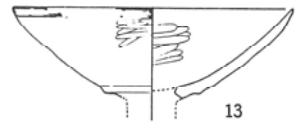

9

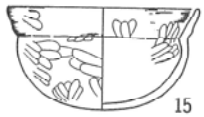

10

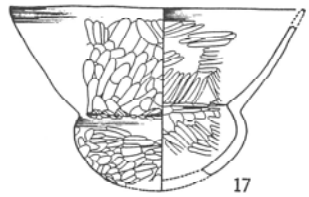

11

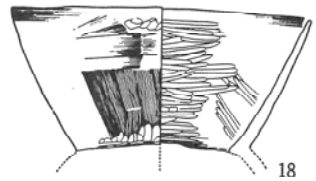

12

14

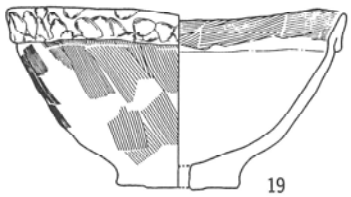

13


15

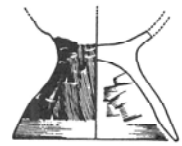

17


18

16


19

20


21

第14図　土師器分類図

石製品

下槇遺跡で出土した石製品は、石製垂飾品2点・子持ち勾玉・有孔円板各1点の4点である。

〈石製垂飾品〉（第15図1・2）

1は第5号住居跡覆土第2層、2は第4号住居跡覆土第2～3層より出土した。両者とも形態は極めて類似している。下の開いた台形の中央部に縦長のすかしを2個所あけ、3本の柱状意匠を残し、上部には、上辺に沿って綾形文を陰刻し、その中心線上に一対の孔を穿ち、両端には小さいえぐりを入れている。すかし下部の文様は、逆三角形に大きく陰刻したうえで、中央に一本横位に陰刻を施こし、この線の上部は、三角形を逆位・正位・逆位に横に連ねた構成で、それぞれ4～5本の平行陰刻線により形成される。下部は、縦の細かい平行陰刻が施されている。最下端には両側にそれぞれ、外向きに「勾玉の尾」状の突起を表現している。全体は、極めて丹念に研磨されている。

1　高さ2.5cm・最大巾2.0cm・厚さ0.25cm・上部小孔径0.1cm・黒褐色

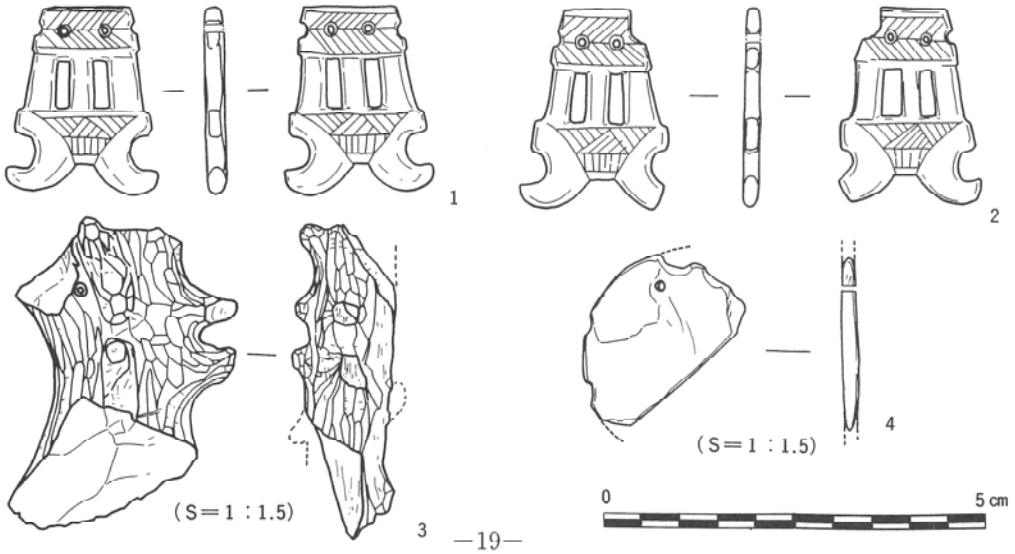
2　高さ2.7cm・最大巾2.0cm・厚さ0.2cm・上部小孔径0.1cm・緑白色・滑石製。

〈子持ち勾玉〉（第15図3）

大形の勾玉の背・腹・胴部に小形の勾玉がつく。頭部・尾部は欠損している。現存から判明可能な小形勾玉は6箇である。腹に小孔を穿ってあり、全面にケズリによる成形痕が明僚に残る。現在高6.2cm・巾3.5cm・厚さ2.0cm・小孔径0.1cm　滑石製。

〈有孔円板〉

径約3.7cm・厚さ0.35cmで、約2分の1が欠損している。現在部には小孔（径0.1cm）が残る。　滑石製。



第15図　石製模造品

IV　まとめ

下槇遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡9棟・土壙・溝跡・ピットなどがある。特に、住居跡については、重複関係がなく、良好な遺存状況であった。各住居跡及び出土遺物に関しての詳細な分析、時期決定はさらに今後の検討を要するが、特徴的な事項について記したい。

1　第1号住居跡は、床面埋設土器（壺6類）をもって時期決定資料とする。器形は、宮城県西野田遺跡・甕A類及び同留沼遺跡甕V類（両者とも塩釜式としている）と類似するものである。

2　第5号住居跡覆土第2～3層出土としたものは、壺1・2・3・4・5・高坏2類があるが、これらについては、層位的、型式的に分類の余地を残し、今後の課題のひとつとなろう。

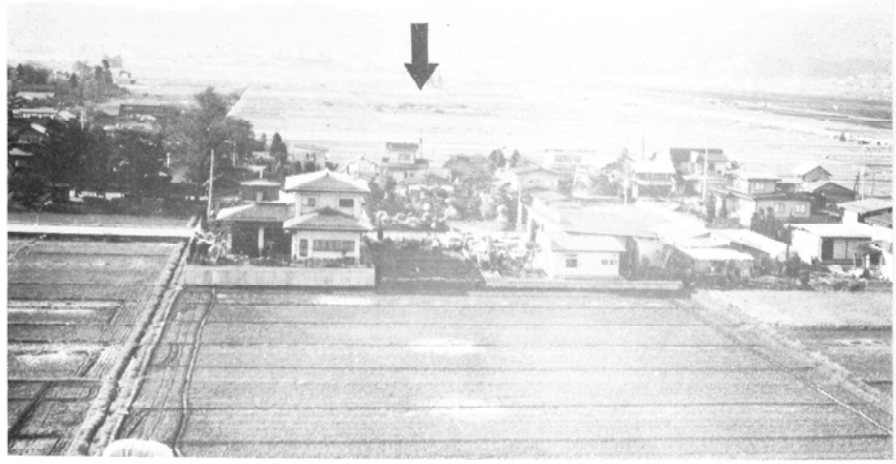
3　第10号住居跡床面直上出土の土器群は、セット関係として把握が可能である。

4　第4号住居跡・第5号住居跡出土の石製垂飾品は、琴柱型石製品の中で「本村（ほんむら）型」と分類されるものである。本村型の出土例は、現在までに福井県丹生郡越前町　厨1号洞穴（4世紀後半～5世紀初頭）・神奈川県横浜市緑区　上谷本第2遺跡（5世紀前半）・長野県北安曇郡池田町　鬼釜遺跡（時期不明）・埼玉県浦和市埼玉大学構内　本村遺跡（6世紀前半）の4例があり、それぞれ、1点づつ出土している。
本遺跡出土の石製垂飾品は、第5号住居跡覆土第2層出土のものにより、その年代がある程度推測されよう。しかし、前述の通り、第5号住居跡出土土器群については、検討の余地が残るのであり、正確な年代の決定は今後の課題である。子持ち勾玉、石製有孔円板の出土と合わせ、古墳時代前期～中期にかけての祭祀遺物的性格をもつ遺物である可能性も考えられる。

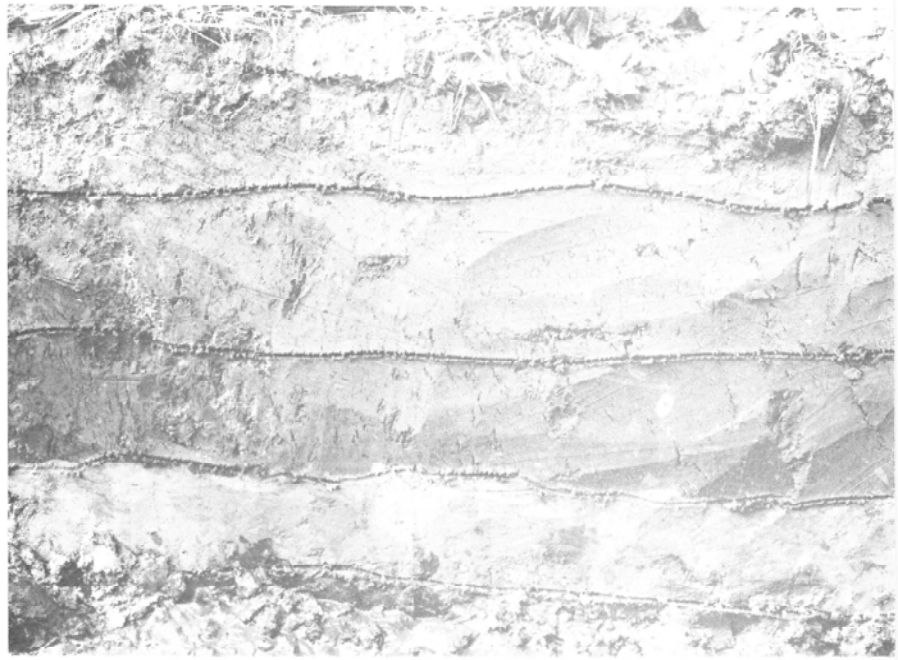
5　下槇遺跡出土の遺物、特に土器群は、古墳時代前期「塩釜式」に併行関係を有するものが主体を成す。しかし、古墳時代中期「南小泉II式」併行と考えられる土器群も相当数出土している。遺構及び遺構内覆土、遺物の出土状況から下槇遺跡は、比較的短い期間に営まれた集落であることが推測されることも合わせ、これらの土器群については、全体をみた場合、時期的にある程度まとまりのあるものとして把えることが可能である。塩釜式後半～南小泉式前半に位置づけられる土器群であろう。

図版　1

下槇遺跡遠景
（東より臨む）



土層セクション



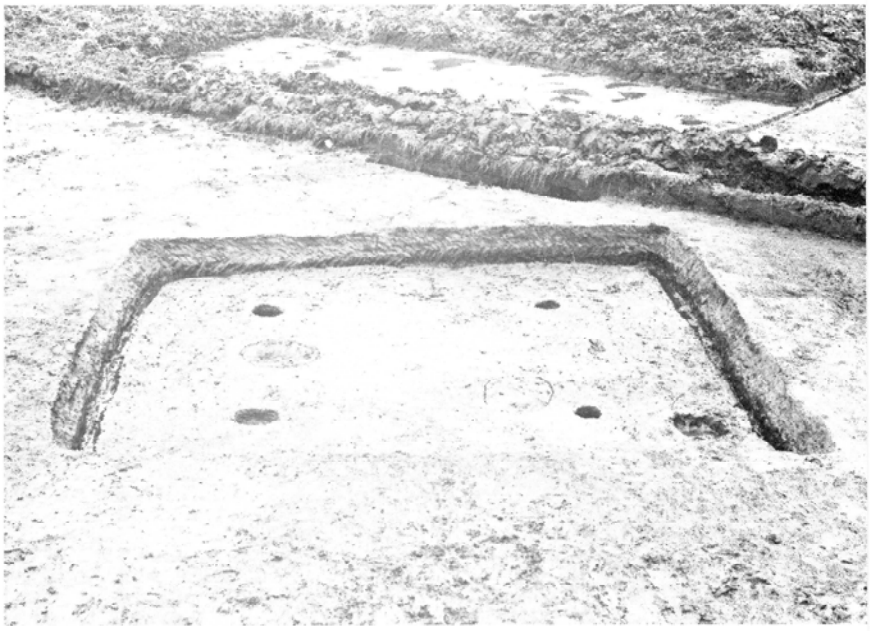
有孔円板
出土状況

子持勾玉
出土状況

図版　2

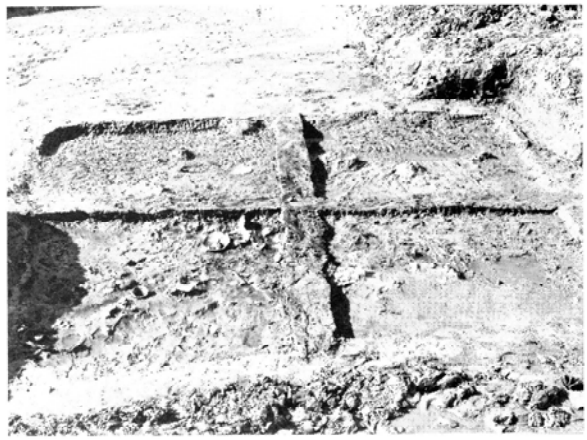
A・B地区平面プラン検出状況

第1号住居跡



第1号住居跡
ＲＰ10出土状況

第5号住居跡

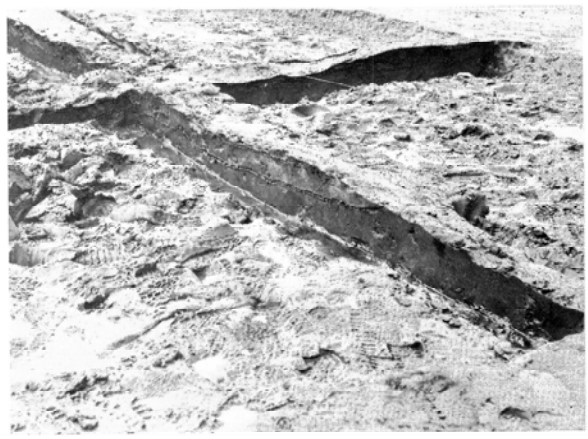


第5号住居跡　遺物出土状況
（覆土第2層）

第5号住居跡　遺物出土状況
（覆土第2層）

第5号住居跡　石製垂飾品出土状況
（覆土第2層）

第5号住居跡　遺物出土状況
（覆土第3層）

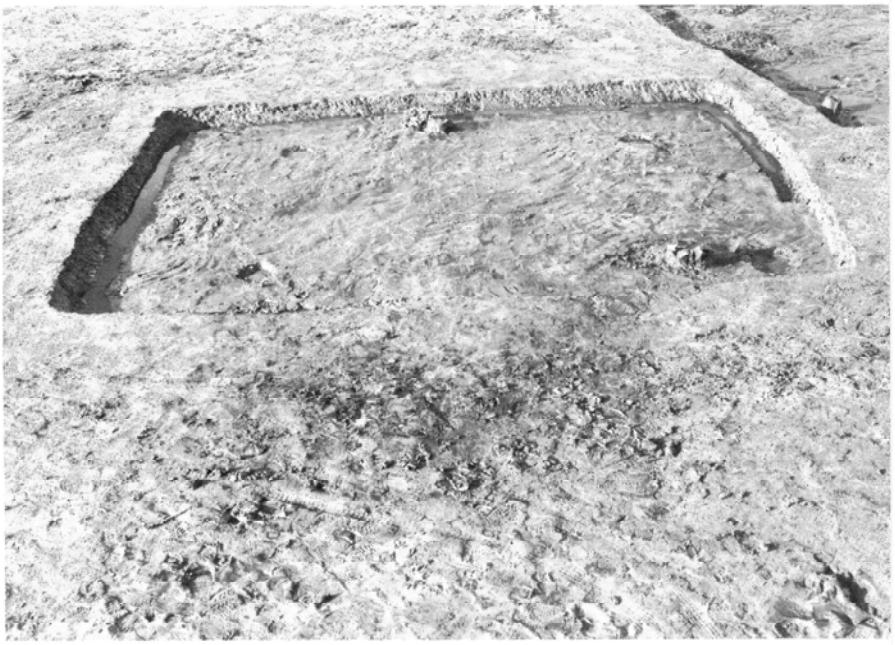


第5号住居跡セクション

図版　4

第 4 号住居跡セクション

第 6 号住居跡



第 9 号住居跡

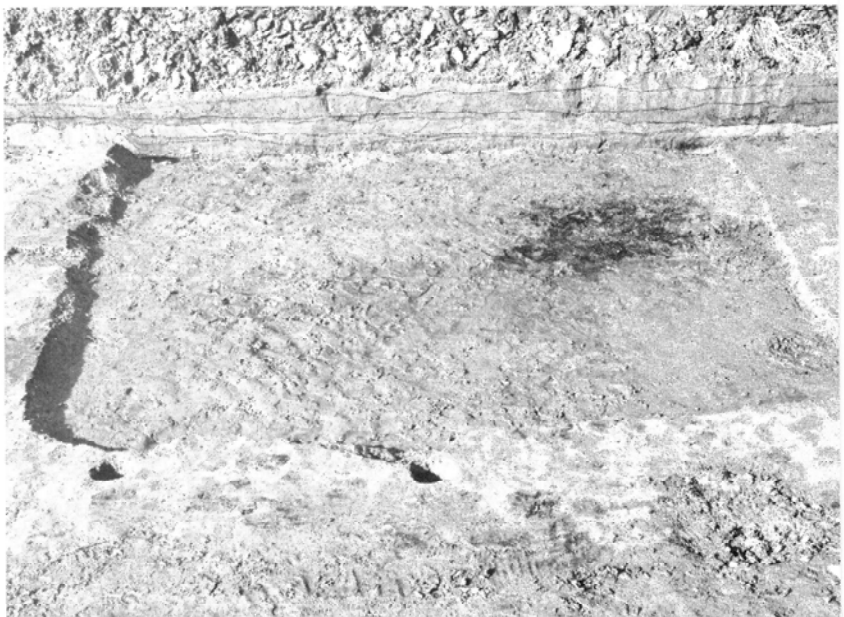
図版　5

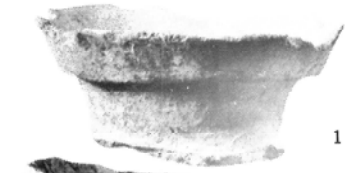
第７号住居跡

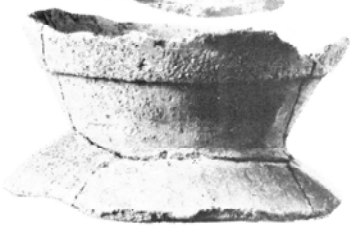
第７号住居跡カマド付近遺物出土状況

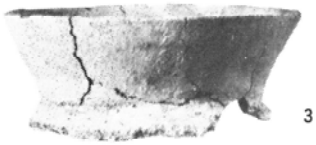
第10号住居跡床面直上遺物出土状況

第10号住居跡

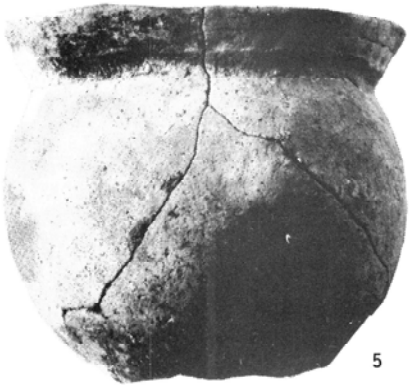


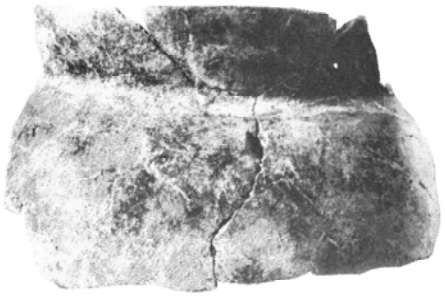

1


2


3

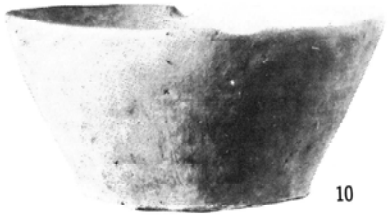
4


5


6

7

8


10

11

12

13

14

15

16

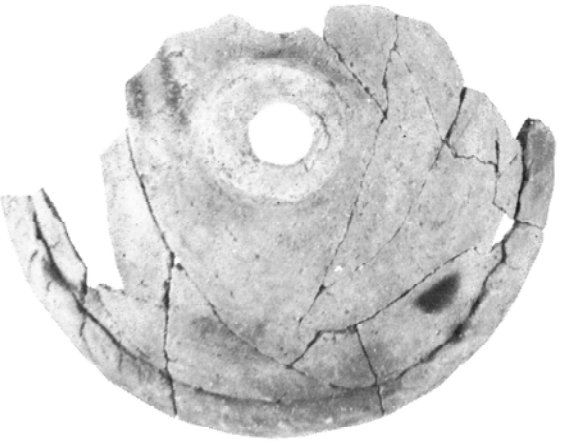
17

18

19

20

21



22

23

24

25

26

27

28

図版　8

山形県埋蔵文化財報告書第39集

下　槇　遺　跡

発掘調査報告書

昭和56年３月25日　印刷
昭和56年３月31日　発行
発行　山形県教育委員会
印刷　大　風　印　刷